
機械兵の一生

コルっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械兵の一生

【Nコード】

N9977X

【作者名】

コルっち

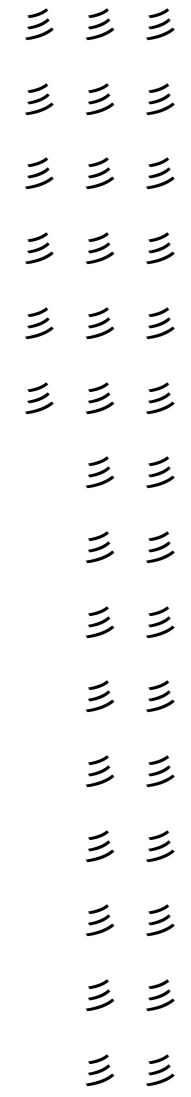
【あらすじ】

ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ
ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ
ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ ミ

ある、機械兵の物語。

まあ、戦ったりとかそんな話です。

最終的に、どうなるかはわかりません・・・



プロローグ

西暦20XX年人口増加と各国の長引く不況や資源の現象による複合的要因による第三次世界戦争が起き最初は人間が戦っていたが1年目で世界の総人口の20パーセントが二年目には35パーセントもの人口が減った。だが、1年目の中盤には各国とも自立型兵器を使いある国がヒューマノイド型を戦場で使うようになり、そうすると各国もその改良をし性能を上げていった。そしてある所で自我を目覚めさせる研究をしている所があった。そこで自我を目覚めさせた機械兵の物語である。

ある山の中腹の擬装した山小屋の地下に作った研究所での事。

「工藤博士、やっと完成しました。」研究者らしき若い男が白衣を着た妙齡の女性に言った。

「クククツ…やっと完成したか」

「では、博士起動を！」

ぼちっ…

「警告！人口培養液を排水します。」

「自己治癒促進自立型機械兵TYPE177-259起動」

ある研究所で彼女と何人かの研究員がひっそりと見守る中、一体のロボットが目を開けた…

1話

目を開けると見知らぬ人たちに囲まれていた。

「正常です。博士、成功しました。」

若い男の声に答えたのは意外にも女の人の声だった。

「クツハハハ、うむ、成功したか…よし計画通りだ。」

「ここはどこだ…？」

と思い尋ねようとしたら、

「ッアアー」

『ここはどこで、この頭に呼びかけてきた声と自分はなんなのか』

と聞こうとして声を出したら何故か上手く声がだせず呻き声にしかならなかった。

そして起き上がるうにも体が動かない。

しかし、ちょうどよく女の博士と呼ばれた人が自分が思った事の疑念に答えるように、話し掛けてきた。

「ここは私の研究所で、君は、私たちが作った自己治癒促進自立型機械兵TYPE177-259だ。まあ、簡単に言うると若くてあまり傷がない死体をベースに作った。そして傷ついてもしばらくすればナノマシンのおかげで治るハイブリッドアンドロイドって所か…さすがに、部位欠損とかだと治るのに時間がかかるのと、不死身つてわけじゃないが普通に生活していれば半永久的に動けるように作

ったType177シリーズは最高傑作だがな。ちなみに、今しゃべれないのはいきなり暴れ出さないように動きを制限させる薬を打ってあるが、あと少しすれば動けるようになるだろう。それとそろそろしゃべれるはずだ。何か質問は？」

「自分は何者なのか？」

「クツハハハ…よくぞ聞いてくれた！」

戦争のせいで、使える兵士が少ないから、若い死体をベースに作った機械兵だつて…

と言つても戦争が始まる前から研究はしていたがな、

しかしつたく、目を開けるたびこいつらは似た質問を…それと、今ある人格は死ぬ前の人のものか、なんなのかはわからない。まあ、明日から一週間程度同じような機械兵とともに訓練をしてから、戦場で頑張ってもらうから、よろぴく！

という訳で伊藤研究員こいつを部屋に連れて行け。」

「はい。おいつ、立て！行くぞ」

と近くにいた白衣を着た若いがつしりした男に言われたがあまりにもい로운なことを簡単に説明されただけだったので…

「いや、それだけじゃわからん！だから自分はこれから何されんだよ！この野郎！」

とりあえずその女に殴ろうとしたら白衣を着た男に掴まれて

プシュ…

体がすぐに動かなくなつたが最後の意識で男の方を向くと男は液体

が入っていない注射を持っていた。
どうやらさされたらしい・・・

そうして意識がとんだ・・・

1話（後書き）

??
??
????????????????????

やっと1話投稿です。

話をどうしていかどうか試行錯誤しながらですので感想や、指摘、その他諸々、ありましたらよろしく願います。

??
??
????????????????????

2話

うっ…

目を開けると蛍光灯が等隔並んでいる天井が…

何があつた？

そういえば…

さっき、殴るうつとしたら意識がなくなつて…

あれっ…今、ここはどこだ？

「うん？目が覚めたのか？」

頭上から声がかかった。

「なら、ここから降りて立って歩け！」

「へっ？」

よく、周りを見回すとどうやら自分はさっき、殴るうつとした、伊藤とかいう研究員にストレッチャーの上に寝かされたまま運ばれているようだった。

「重いからはやくしろ！こっちはお前を運ぶので疲れたんだ！
あと…

あっそつだ、拘束されてないからといって逃げ出そうとしてもここには最新の警備がされているうえ、こっちは傷ついたり、逃げ出そうとしたらすぐ殺せる許可もとつてあるからささっとなんの前を歩け

「！」

「どうやら、逃げ出そうとしたり相手に危害を加えないかぎり平気らしいのでストレッチャーから降りながら」

「わかった。だが、質問してもいいか？」

「面倒くさいからひとつだけならいいが。」

「と言われたので」

「これからどこに行くんだ？」

「これからお前の訓練が終わるまで過ごしてもらおう部屋だ。いいな？」

「これはどうすれば？」

「とたった今降りたストレッチャーを指差すと」

「ああ、これか？誰かが回収してくれるから放置だ。つて訳でグズグズするなささつとあるけ！」

「それ以降、話し掛けようと口を開こうとしたら睨まれたので、他にも聞きたいことがたくさんあったが言ってくれなさそうなので仕方なく目的地まで黙々と歩いた。」

「どうやら研究所は地下に作られているらしく窓はなく周りは無機質なコンクリートと白い蛍光灯ばかり所々ドアがありいるんなプレートがかかっており、」

『第7研究室』 『第8研究室』 … 『第64研究室』 … 『俺の嫁室』
『ガチムチ兄貴室』 … 『射撃場』 『格闘場』 e t c …

途中、目的がよくわからないプレートがかかっていたり変な声が聞こえたりと少し気になって止まりそうになるたびに、「止まるな」とか「はやくしろ」などとせかされた

…

でもなんか気になるな。もし覗ける機会があったら覗いてみようかな？

等といろんな事を考えながら30分程歩くと

『機械兵TYPE177シリーズ』

と書かれたプレートが廊下に張ってありそこからたくさんドアがありそこを進むとやつと『259』と掛かれたプレートが張っている一つのドアの前で止まった。

「ここがお前の部屋だ。あしたは朝に迎えをよこすからそいつについてこい。」

ガチャ…

「えっ？」

2話（後書き）

? ?
? ?
? ?
? ?
? ?
? ?
? ?
?
?
?
?

約10日ぶりの投稿です。

なかなか、書く時間がない・・・

? ?
? ?
? ?
? ?
? ?
? ?
?
?
?
?

3話(前書き)

やっとな、目標にしたたアクセスが100超えました！
今回は、はじめての予約投稿です。

3話

部屋を開けると人がちょうど一人入りそうな大きさの、少し大きめのバスタブみたいで本体は銀色だが所々、透明に区切ってある調整槽の中に半透明の少し水色がかつた液体が満杯に入っていた。

それがひとつ一畳半程度の大きさの部屋にあった。というよりそれしかなかった。

「これから、訓練が終わるまでその調整槽で寝る。そして今日は完成して外に出したばかりだから寝る。寝ている間に勝手に液体の中のナノマシンが調整してくれるはずだから。」

いやいや、唐突にいわれてもね・・・

「あの～寝ろって事は…ここに明日まで入れと？」

「もちろん、当たり前だ。まあ、心配するな、明日の迎えが来るまでこの部屋はロックするから、安全だ。まあ、俺は人間だから入ったことないがメンテみたいな感じらしいからこれで死んだりだとかはおきないと思う。まっ、ささっと入れ！」

ささっと入ってくれないとこっちだって休憩時間にならないし・・・

最後のほう声が小さかったので良く聞こえなかったがとりあえず安全だから入れと言われた。

あっ！そういえば今まで意識してなかったので気にならなかったがこの黒いスウェットスーツっぽい服？を最初から着ていたななど今更ながら思った。

ピタリとフィットしていて、着心地いいな。

それとしかしこれを着たまま入っていいのだろうか？

なので…

「えっと…これ脱いで入るんですか？」

と服を指差しながら聞いてみると、

「その服は水は通さないが、でもこの調整槽の液体は水分子よりも小さく出来ているから、脱がないでもよい。こっちだってお前みたいな、むさい男の体なんてみたくないしな。」

なら、入るか…

ゆっくりと恐る恐る片足を入れてみると……

グチャ、ドロリ…

とてもドロドロとしたゲル状の液体っぽく、すごい変な感じがしたが、左足、腰…と体全体が浸かると段々となにか得体の知れない物が全身の毛穴から徐々に入ってくるという最初は少し鳥肌が徐々に広がり…

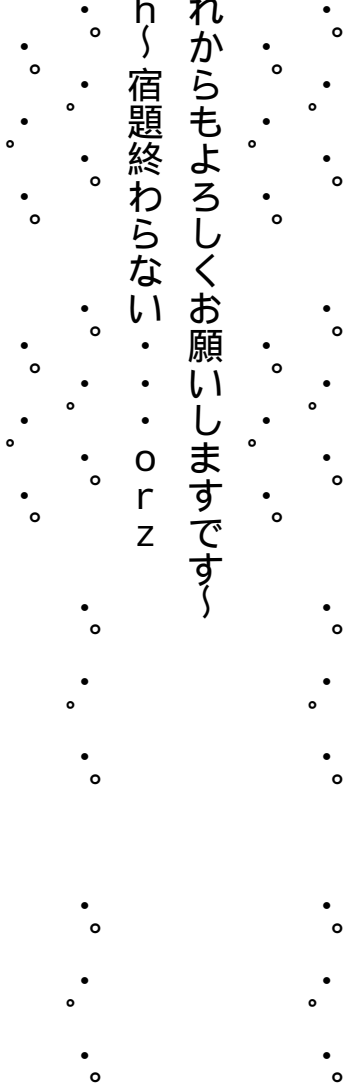
「ギャー！…！！」

という自分のものとは思えない悲鳴が聞こえてそのまま意識がなくなつた。

3話（後書き）

これからもよろしくお願いいたします～

Ah～宿題終わらない・・・orz



4話

ん…あれ？ 見慣れない部屋だな？

そういえば昨日は…と思つた瞬間、あの感覚と全身に鳥肌がたった

…

ハツ… あの嫌な感じで完全に目が覚めた…

あの感覚はとてつもなく嫌な感じだったので本当に思い出したくないから記憶の奥底に永久に封印した…

まあ、それぐらい思い出したくもない感覚だったんだよ…

そして、気絶してたつてことはまさかここはあの液体の中かと思つたが液体はいつの間にか排泄されていたたらしくどうやら自分は何も入ってない調整槽の中で気絶してそのまま寝ていたらしい。なんて事を思つてい立ち上がるうとしたら

ガチャ！

「おいつ、起きろ！これから訓練だ！つて起きてたか…」

と少し低めの渋い声と共にドアが開けられたその先には戦闘用の迷彩服の上からでもわかるぐらいのムキムキマツチョでモヒカンのすごい色黒なオツサンが黒いスマートフォン型の端末が半分くらい入ったケースを持って立っていた。

「えっ、訓練？」

「とりあえずこの端末に地図が入っているから、これ通りに訓練室まで来い！詳しい説明は着いてからだ！じゃあな」

と男は去って行った。どうやら着いてからじゃないと話が進みそうにないので、仕方なく端末通りに行くことにした。部屋を出てみると、自分と同じ格好をした人が何人か端末を見ながら、自分と同じ方向に走っていく。

気になったが、いきなり話しかけようにも何を話せばいいのかわからないし話しかけられることもなかった。他にも何人か自分みたいな奴らがいるんだと思いながら訓練室まで向かった。

歩いて10分程の距離だったが、訓練室に近づくにつれて自分とおんなじ格好をした人たちが増えてきて混んできたが、やっと『訓練室』とプレートが貼られた無骨なドアがありそれをくぐると…

5話(前書き)

情景描写が拙くてごめんなさい・・・
そつえば・・・PVのユニーク100件超k t k r

5話

ドアを開けると部屋というよりは目の前に受付のデスクがあり横に道が別れてた。そしてその受付のデスクに軍服を着たいかにも毎日鍛えてますみたいなおじさんがいた。と思ったらいきなり、

「端末を見せてくれないか？」

きつと端末と言うのは朝に渡されたやつだろう。

「これですか？」

「ああ、これだ。君は形式177の259番だな？」

「なんか、そうよく呼ばれてるんですけど？なんなんすか？」

「よしよし、チェックと…うん？呼び名か？お前の型番さ。まっ、講習で詳しい説明がされるはずさ。」

と言いながら鉛筆で紙にチェックをした。

「講習って？うーんと…朝この端末もらった時、ここに来いと言

わたたので来たんですけど…」

とりあえずわからないので聞いてみた。

「ああ、講習を受けてもらわないといけないからそれと多分、君が考えているいろんな疑問？とかの説明もあるから。とりあえず、君が受ける講習会の場所はこの先にある扉の手前で右に曲がって三番目の部屋で30分後から説明が始まるから好きな所に座って下さい。あつ、ハイっ！これ端末！無くさないようにねー」

「そうですか。」

と言って端末を受け取った。

よし、じゃあ行くかと目の前の廊下を進み、右手に曲がり、一番目と二番目の扉はすぐ通り過ぎたが三番目の扉だけ大分離れていた。

そして三番目の部屋に入ると、中はちょっと遠かったせいなのか広く講義室みたいに段々に机がならんでおり机に椅子が畳まれてるやつで通路は一番端と真ん中に二カ所あり、一番前には大きめなスクリーンと壇があり400人ぐらいは入れそうなくらい広がったが、その半分ぐらいの席はもう男女比7対3ぐらいの人で埋まっていたがしかし、空調の音が少し聞こえるぐらいで雑音はなく、ものすごい静かだった。

うわっ…思っていたより人多いけどその割に静かだなあ…

なんかすごい緊張する…

前の方の席まで行くのも面倒なので真ん中のブロックの通路側の左端の席に座り、周りの人で誰か話やすそうな人がいるかなと周りを

キヨロキヨロと見回してたら、隣の席のが話かけてきた。

「お前、さっきから何を探してんの？拳動不審でウザいから大人しくしててくんない？」

「えっ？」

「なんか見てるだけでムカつくな！ムカつくからキヨロキヨロしないでこっちみないで、前を見て黙ってる！」

静かな部屋だったので相手がちょっと大きめの声だったので少し目立ってしまい、こっちを見てきた人がちらほらといたので、これ以上目立ちたくなかったし関わりたくなかったので

「わかった、わかった、OK、OK！」

と言いながら前を向いた。いやいや、いきなりなんだよ、めんどくさい。

仕方ないのではやく説明が始まらないのかと前を見ながら待っていると、4分の3程席が埋まって少ししたら前方の檀の脇にあった扉から略章をたくさんつけ緑と白と紺色の軍服を着た人が各2人ずつの計6人と白衣を着た女の人が入ってきて。その中で他の人より略章が多めな緑色の軍服を着た人が檀の前にあるマイクに立ち、

「これからの君たちの簡単な説明と行動方針等について説明する。」

5話（後書き）

リア充の方はメリークリスマス

非リア充の方はメリークルシミマス

なのです・・・

P S

去年は12月24日にイルミネーションを見たのですが・・・
22時で大変寒かったにも関わらずだったにも周りは、
女友達や男友達のグループやカップルがたくさん歩いていて、
ぼつちでフードがぶりながら歩いていた自分にとつて
イルミネーションより眩しくなんか自分って場違いだなと思いつつ
イルミネーションの写真を撮っていました・・・
マジで心も体も寒かったのです・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9977x/>

機械兵の一生

2011年12月24日09時47分発行